

次の——線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- 1 兄弟の仲が険悪になる。
- 2 家族の留守を守る。
- 3 父は温厚な性格だ。
- 4 すきま風が入るのを防ぐ。
- 5 やさしい主人に仕える。

二 次——線部のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- 1 書類をユウソウする。
- 2 カイシンのほほえみを浮かべる。
- 3 読書にヨネンがない。
- 4 今年の夏は特にアツい。
- 5 大切な命をアズかる。

信が浮かんできて、もう一度房太郎の身体や顔を眺めまわすようにしてやった。A、というような顔で。しかし私は口先だけ、

「大丈夫だとも。算術の本の問題はたいいでできるんだらう。」

「うん、だけど……。」と言って、房太郎は眼を伏せた。彼が少ししよげた様子を見ると、私はこの年上の友だちに対する自分の優越感を味わうのであった。彼は紺の二重緋から出ている細い脛をぶらぶらさせ、下駄を遠くの方へぼんと抛った。下駄は前の日に降った雨でできた水溜まりに落ちて、裏がえしに浮いた。

女の子たちが四、五人、向こうの生徒出入口から出て来た。掃除当番でもあったのだらう。私の組の子たちであった。どの学年も男女合併で五十人あまりで一組になっていた。その中に西川京子がいるのが私にすぐ分かった。京子はこのごろ隣の町から越して来た駅長の娘で、黒い袴をはいていた。ほかの女の子は、赤い袴をはいているのがあったが、それも二、三人で、あとは、袴をはいていないのだった。西川京子の黒い袴は、何となく都会風で、蒼白い、目尻のやや釣りあがったその顔によく似合っていた。

「あの駅長の子は何て言うんだい？」と房太郎が言った。

京子のことだった。

「あれか、西川京子だよ。」

「できるかい？」

「うん。」

さあっと秋風が吹いて、校門の前のポプラの並木は、一せいにさらさらと鳴り、中ごろから上が弓のように曲がった。帽子が水溜まりに飛ぶ

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

「靖ちゃん、お前どう思う？ おれ中学校に入れると思うかい、思わないかい？」とある日学校で、房太郎は校庭の柵になっている丸太に腰かけて言うのであった。

「入れるさ、大丈夫だよ。一番難しい算術だって、あの本があるからいいし。」

私は、いつとなく房太郎と遊んでいるうちに、彼の気に入るような嘘を言う習慣がついていた。本当にそうだと思うくないことを言うとき、胸のあたりが空っぽになるようで淋しかった。私は、房太郎があの算術の本を持っているだけで、ちっともそれを勉強していないことを知っていた。それどころか学校の六年の算術だって、やっとで、そばで聞いている私にわかることも、何度か田崎先生に説明してもらわないと合点できないことがあった。房太郎は試験前までに、あの鼠色の本をみな覚えておくと言っているが、そんなことはできそうもないと私は思った。六年の算術も、私は房太郎の習っているのをそばで聞いていて、たいいはわかるのだった。これができればもう大丈夫なのよ、と田崎先生が言っている鶴亀算を、房太郎はどうしてものみこめなかったが、私は理解していた。私ならあの本を読めばみんなわかるのだがなあ、と思っていた。

「本当に靖ちゃん、そう思うかい？」彼は不安げに訊くのであった。私が保証すれば間違いないというように。すると私はできる子としての自といけないので、私は底をうんと引き下げた。女の子たちの髪が風に吹かれて、そそけだった。京子の黒い袴は、短目だったので、風に吹かれると白い脛が膝のあたりまで見えた。何だか、私は、風が吹くと淋しく、不安になるのであった。だれも私をかばってくれたり、仲よくしてくれたりする本当の友だちは一人もないような気がするのであった。京子は、同じ組の富永福子ほど可愛い子ではなかった。でも様子全体が都会風で、きびきびしている。どこか男の子のようところがあつた。しかしどの女の子も、私と仲よくしてくれそうもなかった。そして、私といまいっしょにいる房太郎は嘘つきで意地悪だ。私は風の吹く中で自分が全くひとりぼっちで淋しいと思った。

「おい、その下駄を拾ってくれよ。」と房太郎が通りかかった女の子たちに向いた。私は帽子を眼深くかぶったまま、そしらぬふうをしていた。私はポプラの並木が風に揺られては空に向かって手をふりまわすようにしながらまた起きかえるのを見ていた。葉が白く裏がえつた。そういうとき、私は自分が父も母もない孤児のような気持ちになるのであった。でなければ、わあっといつて両手をひろげて風上に向かって走り出したような感じもした。

「おい、その下駄拾ってくれよ。」と房太郎はまた声をかけた。

漁師の娘で、一番身体の大きい竹島ハナが下唇を突き出して赤んべえ、というような顔をした。ほかの女の子は俯いて恥ずかしそうに急ぎ足で、私たちの前を通り抜けようとした。「誰か取ってくれないかなあ。」と房太郎がまた言った。

すると、水溜まりに一番近いところを、頭を下げもせず、急ぎもしな

いで歩いてきた西川京子が、身体を屈めて、下駄の歯を二本の指でひよいとつまみあげ、私たちの腰にかけている柵まで持って来て、「はい下駄。」とそれを房太郎の鼻先へつき出した。房太郎はだまってそれを受けとった。房太郎は急に赤い顔をした。

B という言葉を使う習慣が私たちにはほとんどなかった。私も房太郎の家でお菓子をもらうときなどだまって受け、食べてしまっただけから、C と言うのであった。京子のこういう仕方はこの村のものではなかった。村の女の子たちは、房太郎が彼女らにからかっているのだということを知っていた。京子がそれを、頼まれたことだと思っただけを取ってくれたのは、房太郎をまごつかせた。私もびつくりした。

京子は D 眼つきで、房太郎を見、それから私の方を見て、自分が少し変なことをしたと気がついたらしかった。京子は急に赤い顔になり、友だちのあとを追って走った。ほかの女の子たちは、校門のところ集まって、濡れかけた人が岸に着くのを見るような様子で京子を待っていた。房太郎は、下駄を受けとったものの鼻緒が濡れているので、それを柵の上に、歯をまたがせて、そっと置いた。私たちは二人とも工合が悪くって、しばらく黙っていた。

京子は田崎先生と町にいた時からの知り合いであつたらしく、休み時間、看護当番で田崎先生が運動場に出てくると、よくそばに立って話していた。京子は時々同級の女の子たちと遊んでいることがあつた。しかしその様子はまだこの村の女の子たちとじっくりしていなかった。女の子たちは京子をのけて、ちらっと仲間だけで眼を見交わしたりしていることがあつた。村の女の子たちが町の子をのけものあつかいにするこ

であつた。一種の敵意のある、それでいて親しみのある目つきを、私は京子と交わすのであつた。それでいて、ほかのときは私は京子と話をしたこともなかった。

北の国では秋の早いうちに突然霰が降ったり、冷たい雨が障子を濡らしたりした。目に見えて日が短くなった。房太郎の家では炉に炭火をおこした。そのころから房太郎は前より勉強に熱中しはじめた。房太郎は前と変わって何だか真面目になった。そして彼が真面目になると、私は彼との交友が面白くなるのだった。房太郎が女の子に悪戯したり、店の金を持ち出して、小母さんのくれる煎餅や旭豆でない、本当に甘い饅頭や羊羹の買い食いをして私を仲間に入れるのでなければ、私はつまらなかつた。私が自分ではできないことを、彼が、彼の責任でやる、そして得をするのは私だ、という形の中に、いつの間にか私は溺れていたのだった。

(伊藤 整『少年』による)

* 一重緋Ⅱ裏が付いていない、かすれたような模様の着物。

* 収入役Ⅱ市町村の会計事務を受け持つ役人。

* 旭豆Ⅱ煎った大豆に砂糖をからめた簡単なお菓子。

とを私はよく知っていた。男の子たちですら、漁場の子と農家の子が別なグループを作っていた。私が村で育った子なのに、漁夫でも農家でもない軍人あがりの収入役の子だということと私をのけものにしがちであつた。私が房太郎のような同級でもない妙女子と遊ぶようになったのも、そういう孤独感から来ているのであつた。

私は京子に同情した。京子は勉強は実によくできて、伏見先生は、私と岩田六郎と京子とに、難しい問題を選んで授業時間中でも別にやらせたりした。それは京子が来るまでは、岩田と私の二人がさせられていた特別課題であつたのだ。ほかの子供たちでも、その時間の課題を早く仕上げると、私たちの課題の中から一題か二題割りあてられて、するのであつた。

「来年上級学校を受験するものは、今からその気になって、一題でも二題でも特別問題をしなければいけない。」と先生は皆に言った。

入学試験では都会の生徒に負けるのが常であつたから、教師も生徒も真剣であつた。算術の特別課題をもらうと、京子はやりがいがあるというふうに、一刻も早くという調子で問題にとりかかるのであつた。女生徒の席の一番後ろの隅っこに彼女はいた。私と岩田は男生徒の席の、一番後ろにいたので、それが自然と競争のようになった。もうできたというところになると京子はちらっと顔をあげて、素早く私と岩田の方を見るのであつた。私も、海にもぐるような息苦しい気持ちでその問題にとりかかって、もう一息という所まで来ると岩田の方を見、それから京子の方を見るのであつた。岩田は特別に数理的な頭のいい子で、たいてい一番先に仕上げ、そしらぬ顔をしているが、その次が私と京子との競争

問一 —— 線部1「のみこめなかつた」とありますが、これとほぼ同じ意味のことをこれより前の文章から五字以上十字以内で抜き出して答えなさい。

問二 Aに入ることはとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ぼくが保証するよ
- イ 入れるわけないさ
- ウ 危ないもんだなあ
- エ 安心していいよ

問三 B・Cに入ることはとして適切なものをBはひらがな五字、Cはひらがな六字でそれぞれ答えなさい。

問四 Dに入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ひつしな
- イ まっすぐな
- ウ とくいな
- エ いがいな

問五 —— 線部2「この『優越感』とありますが、この『優越感』とはほぼ同じ気持ちを描べていることばをこれより前の文章から十字以内で抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問六 —— 線部3 「だれもゝのであった」とありますが、私がこのように思うようになった理由を具体的に述べている一文をこれより後の文章中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問七 —— 線部4 「誰か取ってくれないかなあ」とありますが、このように言ったときの房太郎の気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 赤んべえをする竹島ハナに気がねをして女の子たちが下駄を拾おうとしないので、竹島ハナよりも自分の方が強いことを分かってようとしている。

イ どうしても西川京子に下駄を拾ってもらいたいと願っていたので、自分に近づいてきたこのときをのがしてはいけないと思って引きとめようとしている。

ウ 女の子たちが男の子に声をかけられたために恥ずかしそうにしているの、そつと優しく頼みこむことで恥ずかしさを和らげようとしている。

エ 女の子たちをからかおうと思っていてもだれも相手にしてくれないので、本当に困っているようなふりをして立ち止まらせようとしている。

問十 —— 線部7 「海にゝ気持ち」とありますが、この気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア もし間違えたら取り返しの付かないことになってしまふという、必死な気持ち。

イ 真剣に取り組んで一刻も早く問題を解かなければならないという、張りつめた気持ち。

ウ 一番先に仕上げられなければ合格できそうもないと、追いつめられている気持ち。

エ だれよりも早く問題を解いて先生に認めてもらいたいと、あせっている気持ち。

問十一 —— 線部8 「一種のゝ交わすのであった」とありますが、このときの京子に対する私の気持ちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 女生徒の中での特別な存在ではあるが、男生徒女生徒の区別なく共に都会の生徒に競り合えると思っている。

イ 上級学校を目指すには負けられない相手だが、岩田に対しては力を合わせて立ち向かう同志として協力し合えると思っている。

ウ 新しく登場したライバルであるが、互いに刺激し合うことで足りないところを補い合えると思っている。

エ 手ごわい競争相手ではあるが、同じ目的を持って努力している仲間としてお互いの気持ちが理解し合えると思っている。

問八 —— 線部5 「房太郎は急に赤い顔をした」とありますが、房太郎がこのような理由を説明している一文をこれより後の文章中から抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問九 —— 線部6 「溺れかけたゝ待っていた」とありますが、このときの女の子たちを説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア からかわれた京子が早くここまで逃げてくれればいいのにと、心配しながら見守っている。

イ 京子が意地悪をされているのを知っているのに、助けようとはしないで手をこまねいている。

ウ 京子がひどいことをされるのではないかと心配しながらも、興味を持ってながめている。

エ からかわれた京子のことをかわいそうだと思っけれど、自分が悪いのだと冷たい目で見ている。

問十二 —— 線部9 「私がゝいたのだった」とありますが、このように感じている気持ちが態度に表れている一文を抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十三 文章中から「擬人法」が使われている一文を抜き出し、その最初の三字で答えなさい。

問十四 この文章を説明したものと最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 異性に対する興味を持ち始めた少年たちの複雑な心の動きが、多様な表現技法を用いながら描かれている。

イ 上級学校を受験しようとする少年少女たちのお互いに競い合いながら成長していく様子が、軽妙な会話を中心にして描かれている。

ウ 仲がいいように見えながらも気持ちが通っていない二人の少年の様子が、ていねいな描写を積み重ねながら描かれている。

エ 同じ村に住んでいる子供たちの閉ざされた人間関係が、一人ひとりの子供たちの素直な目を通して描かれている。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(ただし、抜き出して答える問題では、句読点等は一字として数えないこと。)

1 絵の前に立つてみよう。見るというのはすばらしいことである。現実の風景や人の動きや顔を見ていても楽しいし、それだけではなく、自然や社会との自分のかかわりあい方、距離、位置などが、見ることによって、おのずからわかってくる。絵を見るのもそれと同じである。というより、すぐれた画家たちの目を通してさまざまなものを見ることができ、るわけだから、私たちは、いわば強化された目で、色彩や形を楽しみ、自然や社会や人を見なおすことができる。

2 もちろん、絵の中には、別な時代、異なった国の自然や人びとの動きがくりひろげられている。それだけではなく、とうぜん、ちがった見方、感じ方がある。この世のなかに、さまざまな言語や風習があるように、もの見え方や見方には、時代によって、社会によって、そして個性によつて、無数の差異がある。一定の光線のもとでのある色彩は、物理学的には恒常値だろう。だが、人によつてその感じ方はちがう。同じ赤を、ある人は生命の強烈さと感じたとしても、別な人は不快な醜さと受けとるかもしれない。同じ人が、そのときの気分によつてちがった反応を示すこともありうる。感覚とは主観的なもので、したがって相対的なものでしかない。

3 a、すぐれた芸術家は、そのような主観性―つまり、その芸術家が生きている時代や社会の動向をもふくめた個性や気分―を尊重し、そ

6 けれども、ここにいくつかの問題が横たわっている。ひとつは好き嫌いの問題である。見方なり感じ方による差があるとすれば、君たちの絵にたいする態度にもそれがあらわれる。ある絵には比較的容易に同調しうるのに、他のある絵にたいしては接近しにくい。それどころか、嫌悪感すらもつかもれない。多くの絵は、私たちの目をみはらせ、心を誘うような色彩と形をもち、主題的にも、美しい風景や花束や裸婦などを描いている。だが、いつもそうとは限らない。無気味な主題が描かれる場合もあれば、悲痛な情景も描かれる。色彩が不協和音のように私たちの神経を逆なですることもあれば、鋭角な形が私たちの心につきささってくることもある。またたとえ、大多数の人が美しいと感じているものにも、ある人は拒否反応を示すこともありうる。

絵を見るということが少なくとも最初は感覚的な作業でしかありえないとすれば、この種の好き嫌いはやむをえないことである。好きなものを大事にすることである。好きになるということは、理解への最初の手がかりだからである。だが、同時に注意しておきたいのは、嫌いなものもまるつきり捨ててほしくないということである。公共の美術館に常時陳列されていて、多くの人がびとの鑑賞にたえている絵は、とうぜんそれなりのすばらしさをもつものと考えてよい。まして美術史上に名を残している巨匠たちの作品は、君たちの好き嫌いなどどこ吹く風と、厳然として存在しつづける。時代をへて、多くの人がびとの目で選ばれてきた存在であるからだ。そしていつかは君たちにもそれがなっとくできるはずだからである。嫌いなものは、それまでそっとしまっておくことである。

れを根拠としながら、そこから普遍的なものをみちびきだしてくれる。画家の目は、私たちを、別な時代、別な国、b 別な感じ方へとみちびき、同時に、そこに普遍的なもの、人間的なものをみいだすのを助けてくれる。

4 ともかくにも絵の前に立つてみることである。そして、ちようと君たちが音楽に耳をかたむけるように、絵のなかに入ろうとすることである。絵の前に立つていけば、その絵は必ず何かを語りかけてくれる。もつとも、声高な絵もあれば、容易に語ってくれない絵もある。概して、絵画は、音楽ほど A 的に心のなかに入ってくれないといつてよい。見るといふのはより B 的な作業だし、ときにはかなり知的な作業だといつてよいからである。とはいっても、最初は、きわめて C 的な印象に身をゆだねるしかない。絵を一べつただけで何かの印象を感じずるといふのは、D 的な作業だから困難なことではない。

5 この最初の一べつと最初の印象のあとで、視線は画面のあちこちをさまよい、あるいは画面のなかに入つてゆこうとする。あるいはまた題名とひきくらべながら、絵の主題やテーマを理解しようとする作業が始まる。第一印象とはちがった印象が生まれてくるかもしれない。思わぬ美しさを発見したり、不思議な形を発見するかもしれない。しかし、良い作品を、じっくり見ることすすめたい。画家たちの目と心に、君たちの目と心がしだいに接近し、同調するのを待つことである。画家たちの目がみだし、歎び、そして組み立てたものをみつめ、画家たちの心の振幅に君たちの心の振幅が同調してくれば、君たちは、そこに新しい世界を発見したことになる。

第二は、知的な理解の問題である。絵画は、色彩と形という感覚的素材をつかつて、さまざまなことを語りかける。感覚的素材の組み立てそのものにも構造があり、したがって論理がある。たとえば、ある形となりどんな形を組み合わせるか、あるいはある色彩にどんな色彩を配するかということは、芸術家たちによつて、それぞれに必然的なつながりをもっている。そしてさらに、その主題、テーマによつても、色彩や形によつても、実にさまざまなことを語っている。さきに述べたように、それらは異なった時代や民族や社会、そして傑出した個性の見方や感じ方を語っている。もの見方というのは、この場合、感覚的な見方であると同時に、その画家の人生観、自然観、世界観でもある。そう考えれば、一枚の絵は、一冊の書物に匹敵するのである。

10 書物を読むには、言葉も、ある程度以上の知識も必要である。それと同じように、絵画の場合でも、それ相應の知識が必要となってくる。宗教絵画や神話画と異なり、近代絵画は、どちらかといえば、主題の点ではさほどの知識を必要としない。それでもなお、よりよい理解のためには、ある程度の知識が要求される。絵の前に立ったとき、きつと、さまざまな疑問が生まれる。その問いを解くのは楽しいといえないだろうか。だが、芸術の理解にとつて知識は先決ではない。まず絵の前に立つてみよう、くりかえしていつておきたい。

さいわい、日本ではたえず西欧絵画の展覧会が開かれているし、名作を常時陳列している美術館もいくつかある。しかし、近代絵画史だけに限つてみても、それらの作品で、絵画史の流れを概観するには不十分な状態である。けれども、数多くの作品を知るよりは、何点かの作品でも、

よりよく感じ、知ることのほうがずっと大切だし、もちろん概観的な知識より、一点の作品が君たちの心のなかに入ることのほうが、よりすばらしいことだといわねばならない。

(中山 公男「絵の前に立つて」による)

* 恒常値＝常に一定で、変化がみられない数値。

* 普遍的な＝広く一般に当てはまるような。

* 概観する＝物事の様子の全体を大まかに見る。

問一 a・b に入ることばとして最も適切なものをそれぞれ次の中から

ら選び、記号で答えなさい。

ア しかも イ そして ウ すると
エ しかし オ だから

問二 ——線部3「一べつ」5「目をみはらせ」6「やむをえない」の使

い方として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

3 一べつ

ア 複雑な機械の構造を一べつするだけで理解してしまった。

イ 朝日に照らされた富士山の光景を一べつしただけで深く感動した。

ウ 友だちが遠くへ引っこす前にせめて一べつだけでもしたい。

エ 大人たちが一人ひとりの子供を一べつするだけで安全が守られる。

5 目をみはらせ

ア 急に降ってきた激しい雨が人々の目をみはらせた。

イ 水かさが増えた河川のように目をみはらせておく。

ウ 鉄棒のすばらしい演技が観客の目をみはらせた。

エ はるかに遠い山々まで目をみはらせることができる。

6 やむをえない

ア 賛成できないがあなたの意見にもやむをえないところがある。

イ 悪天候による野球大会の中止はやむをえないことだった。

ウ 乱暴な仕打ちを受けてやむをえない気持ちになった。

エ 連続試合出場の記事がやむをえないことになってしまった。

問三 ——線部1「いわば強化された目」とありますが、これを説明し

たものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア すぐれた画家のもののとらえ方を自分のものにした見方。

イ 自分と周囲とのかかわりあい方を理解することができた見方。

ウ 自分のものの感じ方に画家のものの感じ方が加わった見方。

エ 風景や人物に対する画家と自分との感じ方の差に気づいた見方。

問四

——線部2「感覚とは、もものでしかない」とありますが、このように述べている筆者の考えを説明したものととして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ものの受け取り方は人それぞれ異なっているものであり、一定の基準があるのではない。

イ 人はそれぞれ別々の感じ方をするが、時代や地域を乗り越えて歩み寄らなければならない。

ウ 個性による無数の差異は尊重すべきことであるが、その差異を互いに主張しすぎてはいけない。

エ もの感じ方は社会や自然との関わりの中で形成されるものであり、一人ひとりの気分的なものに任せてはいけない。

問五 A～D に入ることばの組み合わせとして最も適切なものを次の

中から選び、記号で答えなさい。

ア A 直接 B 感覚 C 受動 D 主体
イ A 直接 B 主体 C 感覚 D 受動
ウ A 主体 B 受動 C 直接 D 感覚
エ A 主体 B 直接 C 受動 D 感覚

問六 ——線部4「君たちは、ことになる」とありますが、この「新しい

世界を発見した」とほぼ同じ意味を述べている部分を、これより前の文章中から十五字以上二十字以内で抜き出し、その最初と最後の三字で答えなさい。

問七

——線部7「嫌いな、ほしい」とありますが、その理由を説明した

ものとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 絵に対する知識がもっと豊富になれば好きになるはずだから。

イ 美術史上に名を残している評価の定まった絵であるから。

ウ 鑑賞者の好き嫌いなどは絵画鑑賞にまったく関係がないから。

エ 今は理解できなくても将来理解できるようになるはずだから。

問八

——線部8「さきに述べたように」とありますが、「さき」の指し示

している連続する二つの段落を 1 から 6 の番号で答えなさい。

問九

——線部9「君たちは、ことになる」とありますが、この「新しい

世界を発見した」とほぼ同じ意味を述べている部分を、これより前の文章中から十五字以上二十字以内で抜き出し、その最初と最後の三字で答えなさい。

ア 絵に対する知識がもっと豊富になれば好きになるはずだから。

イ 美術史上に名を残している評価の定まった絵であるから。

ウ 鑑賞者の好き嫌いなどは絵画鑑賞にまったく関係がないから。

エ 今は理解できなくても将来理解できるようになるはずだから。

問九 — 線部9「傑出した「感じ方」とほぼ同じ意味のことばをこれより前の文章中から十字で抜き出して答えなさい。

問十 — 線部10「一枚の絵は、一するものである」とありますが、この理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 絵画はその主題にそって異なった時代や社会のものの見方を語っており、文章によって時代や社会を映し出そうとしている文筆家たちの作品と一致しているから。

イ 芸術家たちは一つの色彩や形にどういう色彩や形を組み合わせるかということに努力しており、ことばの組み合わせや文体を工夫する作家たちの生き方と共通しているから。

ウ 一枚の絵には色彩と形を使って画家の人生観や世界観が表されており、文字を使って人生観や世界観が表現された一冊の書物と同等に考えることができるから。

エ 画家たちの感覚的な見方によって描かれた絵にはそれぞれの画家の論理があり、論理を積み重ねて結論を導き出そうとする評論家たちの仕事に通じるところがあるから。

問十一 次の部分はある段落の最後に入りますが、その段落を各段落の上にある1から6の番号で答えなさい。

君たちは、ごく気楽な気持ちでポスターを見る。画面のぜんたいなり、図柄のどこかに視線が吸いよせられ、ある印象が生まれる。それと同じように気楽に見てほしい。

問十二 この文章の内容に合うものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 書物を読む場合と同様に絵画鑑賞にも作者に関する知識が必要であり、その知識を身につけなければ鑑賞することはできない。

イ 絵画鑑賞にもある程度の知識は必要であるが、まずは絵が自分に語りかけてくることを素直に聞こうとする姿勢が大切である。

ウ 絵画に好き嫌いがあるのは当然であるが、それ相応の知識が身についてくれば自然に好き嫌いもなくなってくる。

エ 絵画鑑賞は絵をながめることが最も大切であり、絵画史の流れや概観的な知識はかえって役に立たない。

五

次の1～5の四字熟語のグループの中で成り立ちの異なる熟語を一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。また、選んだもの以外の四つの熟語の成り立ちとして適切なものを、それぞれ番号で答えなさい。

1	ア 悪戦苦闘	イ 公明正大	ウ 我田引水
	エ 完全無欠	オ 無理難題	
2	ア 面従腹背	イ 知小謀大	ウ 針小棒大
	エ 内柔外剛	オ 日進月歩	
3	ア 古今東西	イ 利害得失	ウ 離合集散
	エ 有名無実	オ 老若男女	
4	ア 首尾一貫	イ 油断大敵	ウ 一石二鳥
	エ 意気消沈	オ 大器晩成	
5	ア 喜怒哀楽	イ 臨機応変	ウ 花鳥風月
	エ 冠婚葬祭	オ 起承転結	

〔成り立ち〕

- ① 上の熟語が下の熟語にかかっていくもの。
- ② 反対の意味の熟語を組み合わせたもの。
- ③ 一字一字が対等の関係にあるもの。
- ④ 似た意味の熟語を組み合わせたもの。
- ⑤ 反対の意味の語で出来た熟語どうしを組み合わせたもの。